

# 理科室の幽霊

村上 雅郁 (児童文学作家)

「今日の放課後も、理科室に行くから。」

朝、沙夜ちゃんは私に言った。ようするに、いっしょに来い、という意味だった。正直、私は行きたくなかった。早く家に帰ってゲームとかしたい。今日は塾も休みだし、お菓子を食べてだらだらしたい。

しかし、私に拒否する権利はない。いや、権利というか、拒否する能力がない。沙夜ちゃんの大きな黒い瞳にじっと見つめられると、「……分かった。私も行く。」以外の言葉は出てこなくなってしまふ。ここで「いや、私は家に帰ってゲームをする。」とは、とても言えない。そこまで自分の意思を貫き通す力はない。

普通に無理。

六年一組の教室で、算数の授業を聞きながら、私は既に憂鬱だった。窓の外では雨が降っている。

放課後の理科室に女の子の幽霊が出るらしい。

そのうわさが流れ始めたのは、五月の終わりのことだった。

「なんかあ、昔この学校に通っていた子らしいんだけどお、自分がねえ、亡くなったことに気づいていないんだってえ。理科室に忘れ物をしたのを思い出して、幽霊になって探しに来ているんだってえ……。」

そういう感じの話が好きな子たちが、そういう感じで話しているのを私も聞いたことがある。ふざけんなよなと思う。沙夜ちゃんがいるのに、クラスでそんな話をしちやだめだよ。少しは他人の気持ちを考えなさいよ。

しかし、そこまで仲良くない子たちが楽しくうわさ話をしているところに「そんな話しないで。」と割り込むことができる私ではない。私にそんな権利も能力もない。なのでそのうわさはすぐに沙夜ちゃんの耳に入った。

「おもしろいじゃない。」

沙夜ちゃんはいつもの無表情で、それでも楽しそうに言った。

「これはチャンスだと思う。私、これから毎日、放課後理科室に行くことにする。」  
それから、沙夜ちゃんは大きな黒い瞳でじっと私を見つめた。

二人で放課後の理科室に忍び込むようになって、そろそろ一週間になる。  
「誰も来ないわね。」

電気のついていない薄暗い理科室で、沙夜ちゃんはいつもの無表情だ。だけど、  
いかげん、退屈してきたのだということが、その声の調子から伝わってきた。

「結局、うわさが流れるだけで、誰も本当のことを確かめようとはしないのね。教室で好き勝手に話題として消費できれば、それで満足なのかも。」

「そういうものかもね。」

私があらずくと、沙夜ちゃんは言った。

「一人か二人でいいから、来てくれないかな。怖い話が好きな低学年の子とか。そうしたら、あなたが迫真の演技で脅かして……。」

「え、私が脅かすんですか？」

思わず敬語になってしまった。沙夜ちゃんは心外そうな顔をした。

「あたりまえでしょ。」

私は何も言えなかった。沙夜ちゃんはうつむいた。

「せっかくチャンスだと思ったのに。あのうわさを聞いて放課後の理科室を訪ねてくるような子たちがいれば、もしかしたら私のことも……。」

沙夜ちゃんはやっぱり無表情だった。それでも、がっかりしているのが分かった。

「……今のままじゃだめなの？」

私は尋ねる。沙夜ちゃんは黒い大きな瞳で、私のほうを見た。

「何？」

「……何でもない。」

私は首を横に振る。そして小さくため息をつく。

しばらく沈黙があった。窓の外から、誰かのはしゃいでいる声がある。にぎやかに友達どうしてつるんで、これから家に帰るのだろうか、楽しそうな声。

「一人は寂しいから。」

ぽつりと、沙夜ちゃんと言った。

「怖がられてもいい。みんなに私がいることを知ってほしい。」

私<sup>わたし</sup>がいるじゃん。

そう言<sup>い</sup>いたかった。けど、私<sup>わたし</sup>には言<sup>い</sup>えない。

もう一年<sup>いちねん</sup>もせず卒業<sup>そつぎょう</sup>してこの学校<sup>がっこう</sup>から出<sup>で</sup>ていく私<sup>わたし</sup>に、そんなことを言<sup>い</sup>う権利<sup>けんり</sup>はない。

一年生<sup>いちねんせい</sup>のときに出<sup>で</sup>会<sup>あ</sup>い、それからずっといつしよに過<sup>す</sup>ぎしてきた沙夜<sup>さや</sup>ちゃんのとを、どんなに大切<sup>たいせつ</sup>に思<sup>おも</sup>っていても、いや、大切<sup>たいせつ</sup>に思<sup>おも</sup>っているからこそ、その気持<sup>きもち</sup>ちを伝<sup>つた</sup>える能力<sup>のうりよく</sup>が、私<sup>わたし</sup>にはない。

震<sup>ふる</sup>える沙夜<sup>さや</sup>ちゃんの白<sup>しろ</sup>い手<sup>て</sup>を、私<sup>わたし</sup>はそっと握<sup>にぎ</sup>ってあげたかった。

けど、私<sup>わたし</sup>は彼女<sup>かのじょ</sup>に触<sup>ふ</sup>れられない。

私<sup>わたし</sup>の手<sup>て</sup>は沙夜<sup>さや</sup>ちゃんの手<sup>て</sup>をすり抜<sup>ぬ</sup>ける。指<sup>ゆび</sup>先に冷<sup>つめ</sup>たくて固<sup>かた</sup>い床<sup>ゆか</sup>の感<sup>かん</sup>触<sup>しよく</sup>。

「私<sup>わたし</sup>のことが見<sup>み</sup>える子<sup>こ</sup>が、もっとたくさんいればいいのに。」

沙夜<sup>さや</sup>ちゃんは言<sup>い</sup>った。私<sup>わたし</sup>は黙<sup>だま</sup>っていた。

何<sup>なんじゅうねん</sup>十年<sup>じゅうねん</sup>も独<sup>ひと</sup>りぼっちでこの学校<sup>がっこう</sup>にとりついてい<sup>い</sup>る沙夜<sup>さや</sup>ちゃんに、たかだか六<sup>ろくねんかん</sup>年間<sup>ねんかん</sup>しかいつしよにいられない私<sup>わたし</sup>の言<sup>い</sup>葉<sup>は</sup>なんて、届<sup>とど</sup>くはずない。

けど……。

「……私<sup>わたし</sup>が、いる、じゃん。」

絞<sup>しぼ</sup>り出<sup>だ</sup>した声<sup>こゑ</sup>はかすかで、みっともなく震<sup>ふる</sup>えていた。

耳<sup>みみ</sup>のあたりが熱<sup>あつ</sup>くなって、泣<sup>な</sup>きたくて、私<sup>わたし</sup>は沙夜<sup>さや</sup>ちゃんの顔<sup>かお</sup>を見<sup>み</sup>れない。

しばらくして、沙夜<sup>さや</sup>ちゃんはそっと立<sup>た</sup>ちあがると、スカート<sup>スカート</sup>の裾<sup>すそ</sup>を払<sup>はら</sup>って言<sup>い</sup>った。

「明日<sup>あす</sup>の放<sup>ほう</sup>課<sup>か</sup>後<sup>ご</sup>も、ここに来<sup>く</sup>るから。」

私<sup>わたし</sup>は小さく笑<sup>わら</sup>って、分<sup>わ</sup>かっている、と答<sup>こた</sup>える。それから、そっと目<sup>め</sup>元<sup>もと</sup>をぬぐった。

分<sup>わ</sup>かっている——私<sup>わたし</sup>は、その言<sup>い</sup>葉<sup>は</sup>の意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>を、本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>はちやんと分<sup>わ</sup>かっている。

一<sup>いっ</sup>か月<sup>げつ</sup>もしないうちに、理<sup>り</sup>科<sup>か</sup>室<sup>しつ</sup>の幽<sup>ゆう</sup>霊<sup>れい</sup>のうわさは聞<sup>き</sup>かれなくなった。

それでも、沙夜<sup>さや</sup>ちゃんはまだ、放<sup>ほう</sup>課<sup>か</sup>後<sup>ご</sup>に私<sup>わたし</sup>を誘<sup>さそ</sup>って理<sup>り</sup>科<sup>か</sup>室<sup>しつ</sup>に向<sup>む</sup>かう。



村上雅郁（むらかみ まさふみ）

一九九一年、神奈川県生まれ。『あの子の秘密』（フレールベル館 二〇一九年）で第四十九回児童文芸新人賞、『りぼんちゃん』（フレールベル館 二〇二一年）で第一回高校生が選ぶ掛川文学賞をそれぞれ受賞。ほかの著書に、『きみの話を聞かせてくれよ』（フレールベル館 二〇二三年）、『あなたの心』（フレールベル館 二〇二四年）など多数。